

タイにおける保健医療福祉サービス 大学での早期海外体験実習を通して

タマサート

著者	出原 弥和, 犬丸 杏里
雑誌名	三重看護学誌
巻 号	15 1
ページ	89-94
発行年	2013-03-15
その他のタイトル	Health and welfare services in Thailand Participation in Nursing Students Early Overseas Practice, Thammasat University
URL	http://hdl.handle.net/10076/12451

タイにおける保健医療福祉サービス

— タマサート大学での早期海外体験実習を通して —

出原 弥和¹, 犬丸 杏里²

Health and welfare services in Thailand

— Participation in Nursing Students Early Overseas Practice, Thammasat University —

Miwa IZUHARA and Anri INUMARU

Key Words: Thailand, health and welfare, overseas practice

はじめに

本学とタマサート大学は、部局間協定、大学間協定を締結し、従来から交流が行われている。また今年は医学部と学生交流に関する覚書を締結した。今回の医学・看護学教育センターが主催する早期海外体験実習は、その後初めての实習であり、より充実した実習ができたと感じている。そこで本稿は、学生がどのような施設で、どのような実習を体験したかについて報告をする。なお、掲載した写真については、撮影時に報告書に掲載することについて許可をいただいている。

1. 実習日程

1) 渡航日程

2012年8月27日から2012年9月4日（現地滞在7泊8日）

2) 実習スケジュール

8月27日

中部国際空港出発 Suvarnabhumi 国際空港到着
到着ロビーでタマサート大学国際交流担当職員 Boongsong 氏に出迎えられる。

レストランへ移動し、Welcome dinner へ参加する。

8月28日

Visiting at Early Childhood Development Center

Visiting at Facility of Elderly (Watsavet Center)

8月29日

Visiting at Community Health Unit at Klongluang district

Visiting Primary Health Care Unit (Khoo Khot)

8月30日

Visit to Srithanya Hospital (Mental Hospital)

8月31日

Visiting School Health at Prathomsuksa Thammasat School

Visiting Phrabatnampu Temple in Lopburi, to study HIV/AIDS patients

9月1日

Shopping at Weekend market

City tour in Bangkok

9月2日

Visiting historical sites in Ayutthaya such as Bangpa-In palece, Phanchoeng temple, Chaiwatthanaram temple, Watyaichaimongkol temple and elephant riding

Dinner on Cruise (Chao Phraya River)

9月3日

Visiting at Grand Palace, Wat Arun, Wat Pho
Suvannabhum 国際空港出発

9月4日

名古屋国際空港へ帰国

2. Thailand

学生たちは、事前学習として学内でタイの文化や医

1 三重大学医学部 医学・看護学教育センター

2 三重大学医学部 成人・精神看護学講座

療保険制度、タイ語などをゼミ形式で学び、タイでの実習に備えた。

1) タイについて

タイは東南アジアの中心に位置し、経済や、教育・文化の中心でもある。国土は日本の約 1.4 倍である(図 1)。気候は熱帯性気候で年間の平均気温は 29 度もあり、年中半袖シャツで過ごすことができる。国民の 95% は敬虔な仏教徒である。



図 1 Thailand

2) 保健医療制度

(1) 医療機関

公立機関、民間機関の総合病院、診療所があり、病院については日本と変わらない。特徴的なのは、タンボンレベルに設置されている政府誘導の Primary Care Unit (PCU) である。ここでは地域住民の健康増進や一次医療の役割を持ち、看護師と地域住民ボランティアが活動している。

(2) 医療保険制度

タイでは、主な医療保険制度に 30 バーツ制度、民間企業者向けの社会保障制度、公務員医療給付制度がある。一番人口比率の高い農民や自営業者は、30 バーツ制度の対象となる。30 バーツ制度はそれらの低所得者が 1 日 1 疾患 30 Bath の支払いで医療が受けられる。

3. 体験実習

1) 実習 1 日目

朝、7 時にホテルの玄関へ集合し、大学の Boongsong 氏の案内のもと、車に乗り込み、タマサート大学ランシットキャンパスの医学部へ到着する。初めてのタイの大学キャンパスはあまりにも広く学生たちは驚きと感激でみわたしていた。そして、学部内のカフェテリアでフルーツジュースやシェイクを買い、学生同士いろいろな味試しを楽しんだ。

その後、再び車に乗り込み、大学内の Early Childhood Development Center を訪問する。ここでの出迎いは手の消毒だった。それぞれ手にアルコールのジェルを塗りこみ、会議室へ通される。施設紹介のプレゼンテーションを全員で受けたが、初めての英語の講義に圧倒される学生も多かった。また、一人ずつ英語での自己紹介にチャレンジもした。プレゼンテーションから感じたことは、一ヶ月の保育料が高いこと。たとえば、一番低額の 2 歳以上のクラスでは、4,200 Bath/月。これは日本円にすると約 1 万 2 千円であるが、タイでの月収や物価から考えると、平均月収の 1/3~1/4 にあたる。

次に 3 グループに分かれ、園内の施設を見学する(写真 1)。園内は広々とし、子ども達は裸足で走りまわっていた。2 年生のタイ看護学生や、他施設からの見学がよくあるそうで、子ども達は見学者に慣れている様子。外でも遊ぶが、屋内はクーラーがとても効いており、寒いくらいであった。園内施設には、年齢別の各クラスの部屋、遊戯室、シャワールーム、保健室などがある。中でも、保健室は看護師 1 人が常勤で勤務しており、園児の健康状態を把握している。成長・発達のチェックは 6 か月毎に行われており、その結果、逸脱児のケースには 3 か月毎に 1 度、デンバー式発達スクリーニング検査を実施している。すべての検査には、両親が立ち会うことを聞き、とても驚いた反面、施設と家庭がとても近い存在であるように感じた。園



写真 1 園内のプレイルーム

の保健室で取り扱ったすべてのケースについて、看護師は看護学部長に報告する義務がある。なぜなら、この幼稚園はタマサート大学看護学部の附属施設だからである。

午後は、老人ホーム (Elderly center)。利用者さんが奏でる音楽と、施設の方が両側に並んで出迎えてくれた。施設全体が広大で、広い廊下続き平屋が並ぶ。この施設は政府からの資金で運営され、部屋のタイプは無料、有料一戸建て、有料アパートの3種類ある。無料の部屋は広い部屋にベッドとロッカーが並べられ、一人のスペース (写真2) は狭い。それに対し、有料の部屋は6×6mと広く、トイレとバスがあるが、1か月約5,000円必要である (写真3)。入所時に20万Bath (約55万円) 必要だが、施設のスタッフもいるので安心でき夜も淋しくない。100人待ちというのもわかる気がする。しかし、有料の場合はやはりタイ人にとって高額で、入れるのは年金のある元公務員ぐらいなのかもしれない。

2) 実習2日目

前日と同様にホテルの玄関に集合し、大学のキャンパスへ向かう。大学で看護学部の地域看護学を担当している先生の同行により、アユタヤ県に母子の家庭訪

問に向かう。その道中、彼女が説明をしてくれる。タマサート大学看護学部は1学年80~100人で、教員は40名、大学院生30~50名ほどいる。3年生は各領域実習、4年生は地域実習に出る。日本とあまり変わらない。専門科目はタイ語で授業をされているが、国際化のため一般教養科目は英語の授業もあるそうだ。教員は海外で博士号を取得してくることが多い。その際は国からの奨学金がもらえ、3~7年程留学することができる。

訪問先の家庭に到着。道端に建つタイでは大きめの家屋である。この日は、4年生の看護学生5人の実習に同行させてもらい見学をする。普段は一人の看護師が家族メンバーの全員を看ているが、今日は看護学生が2班分かれて看ている。訪問した家庭には36歳の初産の褥婦が退院1週間目で育児をしている。そして兄嫁と幼児の息子、母親、そして学生の看護対象ではないが、ポリオで手足の拘縮がみられる娘が同居している大家族である。タイの看護学生2人は褥婦と新生児の身体診査から、保健指導までを少し緊張しながら行い (写真4)、残りの学生たちは兄嫁と息子、母親の身体診査を行っていた (写真5)。教員は学生の診察をニコニコしながら見守っていて、ほとんど手を出すことはない。兄夫婦の息子は土間を裸足で歩き、土



写真2 老人ホームの無料部屋



写真4 家庭訪問での新生児観察



写真3 老人ホームの有料個室



写真5 家庭訪問での家族の健康診査

埃の被ったゆりかごに置かれている哺乳瓶をさりげなく衝える。あまり清潔とは言えない環境の中、学生は手洗い、清潔区域の保持を行っていた。三重大学の学生たちが清潔区域とされた清潔布を覗き込むことも禁止されるほど、清潔操作に慎重であった。そんな少し緊迫した家庭訪問の光景を学生たちはどう感じただろうか。

その家庭を後にし、政府が管轄する地域の Community Health Care Center へ移動する（写真6）。Community Health Care Center は、タイの行政区のタンボンレベル（日本でいう小学校区くらい）に1か所設けられていて、地域住民のプライマリケアを担っている。訪問したセンターは、100年程前に造られた水路で区切られた14の地域を包括し、地域一帯を管轄としている。そこでは看護師一人が働いていた。時には熱中症で運ばれた住民に点滴をしたり、予防接種なども行っている。壁という壁には保健活動のポスターが貼られていた。1家庭にカルテが1冊あり、家族構成員全ての健康状態が記載されている。私達の訪問の終わりには、一人の住民が看護師を待っていた。カウンターには番号札が置かれているので、時にはそれ程の住民が来るのであろう。

午後は、タマサート大学病院管轄の Primary Care Center (PCU) を訪問した（写真7）。30 km² の地区を18個に分け、4つの施設（Community Health Care Center）がそれぞれの地区を担当している。訪ねた PCU は医師と看護師と薬剤師が常駐していた。印象としては日本でいうクリニックだが、管轄内の Community Health Care Center のマネジメント機能もっており、各センターに週1回ずつ医師を派遣している。1日に200~250人の患者が訪れ、2~3人の医師、5~6人の看護師、2人の検査技師、2人の事務員などが対応している。緊急を要する患者は少なく、必要に応じてタマサート大学病院へ搬送される。カルテも電子化され、ペーパーレスの方向へ移行している。



写真7 PCU 受付

玄関近くにはお布施が置いてあり、まとめて病院からお寺へ渡すらしい。この施設で私たちに説明してくれた看護師は、流ちょうな英語を話し、とてもかっよく見えた。

3) 実習3日目

この日は朝から道路が渋滞で一時間程かけてスリタヤ精神病院を訪問する（写真8）。大学の精神看護学担当教員のササラ先生とノート先生が病院内を案内してくれる。病院の敷地はとても広く、緑がとても多い。精神病院の隣にはグループホームが建設中であった。

ベッド数1,400ととても規模が大きい。患者のほとんどが30パーツ政策の対象だという。平均在院日数は56日と日本に比べて短い。また、急性期の患者の場合は14日と更に短い。外来は500人/8人の医師/日で、救急患者も受け入れている。救急室には暴れる患者を収容するための部屋があり、抑制するための拘束具付のイスや、壁が衝撃を緩衝するような柔らかいカバーで覆われていた。それらを他の患者や家族から隠すような配慮もしていない。身体拘束に対する考え方が日本とは異なるようだ。

次に、亜急性の女性用入院病棟に入らせてもらった。25ベッドほどが同じフロアにあり、隣ベッドとの間



写真6 Community Health Care Center 外観



写真8 スリタヤ精神病院外観

は一人一人が通るのがやっとの狭さ。一人一人のパーソナルスペースを隔てるカーテンといったものはなく、ナースステーションから全てが見渡せるようになっている。Electroconvulsive treatment (ECT) は日常的な治療として行われており、鎮静のため酸素が常備されている。また、同じ室内でアロマセラピーや音楽セラピーが実施されているようだ。

最後に案内されたのは、患者たちが作業療法で作成した小物を販売するショップとそこに隣接する水処理施設だ。水処理では、水道水を浄化し清潔なペットボトルへ充填していく。それを商品として出荷するそうだ。ここでは、元入院患者であった青年が毎日、作業療法の1つとして通ってきている。彼にはお給料も支給されている。

4) 4日目

タマサート大学敷地内にある附属の小学校を訪ねた。児童が英語と日本語で出迎えてくれた。学校保健活動実習として、看護学生がムンプスワクチンの予防接種を準備していた。3名の看護学生は初めて予防接種を受ける1年生に対して予防接種の受け方についての寸劇を催していた(写真9)。看護学生は4年生と聞いたが、堂々とした活動ぶりだった。

昨年の洪水被害で一階の図書室はほとんど本がなく、児童の作成した手作りの本が置いてある。授業では英語が2年生から始まり、出迎えてくれた6年生は流暢に話し、図書室にも英語の手作り本が置かれていた。日本語で挨拶してくれた姉弟は父が日本人だそうで、恥ずかしそうにしながらも私達と写真をとってくれた。この小学校の児童は、国際色が豊かであり、また身なりからも容易に裕福な家庭が想像できた。

午後はロップリーに2時間ほどかけて移動し、Phrabatnamp 寺院を訪問する。この施設は、1979年にお寺として開かれ、1999年に当時の僧が AIDS 患者を受け入れたことから始まった。政府の施設ではな

いため、僧の社会活動やボランティアで運営を維持している。

寺の門を潜ると、施設の職員が我々を出迎えてくれた。まず、最初に案内されたのは、到着後最初に目にした大きな建物である。中に入ると、何体ものミイラがガラスケースや金網に保存されて(タイの医療制度で、保険に加入できない低所得者が1日1疾患30 Bathの支払いで医療が受けられる)いる。中には腐敗が進行しているものもあり、少し匂いも感じた。説明によると、AIDSで亡くなられた方を見ることによって次世代への啓発の意味があるそうだ。その建物と道を挟んで反対側には、緑の三角屋根がかわいい感じの小さな家がずらりと並んでいる(写真10)。その家の1つ1つが患者の住まいになっていて、夫婦で生活している人もいる。

次に敷地の中央部へ進むと、右側にある小さな山の中腹に寺の本堂が見え、長い階段で導かれている。その反対側に、自力での生活ができなくなった方を収容する建物がある。ここは、30名ほどの方が、広い部屋に置かれたそれぞれのベッドに横たわっていた。この部屋は、男女混合で利用しており、パーソナルスペースは、今まで訪問してきた施設同様、とても狭かった。この施設は、医療施設ではないため、医療行為にも限界がある。マンパワーでは看護師が3人勤務しているが、そのほかはボランティアの協力が大きい。

4. アクティビティ

休日を利用し、タイの文化に触れるため観光地などを訪れた。

タイ庶民のマーケットであるチャドチャックのウィークエンドマーケットに出向いた。そこには、ストラップなどの雑貨から、家具、動物まで扱う屋台があり、その品揃えの多さに驚くとともに、細い通路に小さな屋台がひしめく中、人々が肩が触れ合う距離で行きかっている。学生の中には、自分の居場所が分からなくな



写真9 看護学生の学校保健実習



写真10 HIV/AIDS患者収容施設

り、時間になっても集合場所に戻って来られないものもいた。

アユタヤでは、日本人町や寺院を訪れ、参拝の方法の違いに戸惑いながらも体験をした(写真11)。また、どの寺院にもきらびやかな大きな仏像や仏塔がありその盛大さに圧倒された。ワットマハタートでは、ガイドブックで見た通り首がもぎ取られた仏像が多く並び、その一つの首は、長年の年月を経て1本の木の根に埋まり、木の成長と共に地面より這い上がってきている。遠い過去のアユタヤ王朝時代、またその後の内乱の時代を垣間見た気がした。その後、同じアユタヤ県にある水上マーケットに行き、ボートに乗りながら、いろいろなお店に並ぶタイの民芸品などを見て楽しんだ(写真12)。

この学生たちの観光に、タマサート大学医学部の学生たちが同行してくれた。三重大学の学生たちは、同世代のタイの学生と触れ合い、言葉に苦労しながらお互いの学生生活のことや文化のこと、今の流行などのおしゃべりを通し、楽しい期間を過ごした。



写真11 寺院での参拝



写真12 アユタヤ水上マーケット

おわりに

今回、現地滞在7日間という短いスケジュールであったが、タマサート大学医学部や看護学部の協力により、とても充実した体験実習になった。海外での体験は、若い学生たちの視野を広げ、今後の学習や生活において大きな力になるだろう。このような機会をいただいたことに感謝するとともに、今後もこのような実習が行えることを願いたい。

引用

タイ政府観光庁：<http://www.thailandtravel.or.jp/>
<http://www.greenholiday.com.sg/bkk/thaimap.gif>

キーワード：Thailand, 保健医療福祉, 海外実習